20世紀におけるアイルランドの
家族・コミュニティー研究の視座

清水由文*

1. はじめに

筆者は先稿においてアイルランドの家族とコミュニティーの研究者および20世紀初頭においてアイルランドにおける直系家族の存在確認を先行研究に基づいて行った。そこで研究史のフォローが不充分であったと思われるので21世紀の開始にともない改めて本稿で20世紀におけるアイルランドの家族とコミュニティー研究の総括をすることにより意義があるといえよう。


ところで近年アイルランドにおける社会科学では「アイルランド—北と南」1というタイトルが示すように1998年の北アイルランドの和平条約以降、北アイルランドとアイルランド共和国を含めて総合的に問題を展開する研究が盛んに見られるようになる。そこで本稿でも研究史を農村—都市とアイルランド共和国—北アイルランドという2つの軸から家族とコミュニティーの研究実態を検討することにしよう。

表1は20世紀におけるアイルランドにおける家族とコミュニティー研究を時系列的に示したものである。それを概観すれば農村家族・農村コミュニティー研究では圧倒的にアイルランド共和国の研究が各年代において多いこと、北アイルランドの場合には1970年代と1980年代ぐらいうちに集中性があることがわかる。またアイルランド共和国の研究対象が西部地域に限定され、東部地域が極めて少ないという特徴も認められる。そのような農村家族・農村コミュニティー研究に対して、都市家族・都市コミュニティー研究には1970年代以降に展開されると言う研究の後発性がコントラストに見とめられるのである。

つまりアイルランドでは1960年代に農村人口と都市人口が同じになるが、都市研究も都市化に対応して展開されてきたとみなされる。そこで以下ではアイルランドにおける家族・コミュニティー研究を①アレンスパークとキャンボールの研究、②アレンスパークとキャンボールを継承したモノグラフ研究、③コミュニティーの変動視角から再検討された研究、④北アイルランドにおけるプロテスタントとカトリック間二分法による研究、⑤直系家族研究、⑥都市家族・都市コミュニティー研究という2つの視点で示したすべての研究をレビューすることは不可能なので代表的と考えられる研究の検討に限定せざるをえないことをお断りしておく。

そこでまずアイルランドにおける家族、コミュニティーの先駆的研究をみてみよう。

*本学社会学部

1）撮稿「アイルランドにおける直系家族の一考察（1）」、桃田学院大学「社会学論集」第27巻第2号、1994、33-69。
表1. アイルランドにおける家族・コミュニティーの研究系譜

<table>
<thead>
<tr>
<th>年代</th>
<th>農村家族と農村コミュニティー研究</th>
<th>都市家族と都市コミュニティー研究</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1930年代以前</td>
<td>Browne, C. R. (1891, 1894, 1895, 1898, 1899, 1900)西部アイルランドのエスノグラフィー</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Arensberg, C. M. &amp; Kimball, S. T. (1940, 1968) アイルランド西部農村の家族とコミュニティー研究</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1940年代</td>
<td>O’Neil, P. (1940) ドニゴール西部農村における小作農の社会的・経済的研究</td>
<td>Mogey, J. M. (1947) 5地域の農村生活エノグラフ</td>
</tr>
<tr>
<td>1950年代</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>An Foras Talunatais (1963) テニグツ資源調査（経済・人口・社会学的研究）</td>
<td>Humpherys, A. J. (1966)ダブリンにおける都市化と家族</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>McNabb, P. (1964) リムリックの農村社会構造研究</td>
<td>Harris, R. (1961) ディローン、コミュニティーにおけるリーダーの選択</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Edward, J. A. (1965) ラウズ州の農村史</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Fox, J. R. (1966, 1978) トーリー島の土地と家族・親族エノグラフ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Kane, E. (1968) 家族・親族研究</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Hammond, H. (1968) アイルランド・クリア農村とイギリス農村のモデル</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Curry, J. (1968) メイヨー農村のエノグラフ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Cresswell, R. (1969) クレア農村のエノグラフ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Messenger, J. C. (1969) ゴールウェイ島のエノグラフ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>An Foras Talunatais (1969) ドニゴール資源調査（経済・人口・社会学的側面）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Smyth, W. J. (1969) 南ティベラリー村落エノグラフ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Lucey, D &amp; Kaldor, D (1969) 西部アイルランド農村への産業化のインパクト</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
20世紀におけるアイルランドの家族・コミュニティー研究の視座

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>McGennis, B. K. (1971)</td>
<td>農村家族における役割構造と家族周辺</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Symes, D. G. (1972)</td>
<td>ケリー農村における家族と農業労働</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Brody, H. (1973)</td>
<td>クレア州農村モデルグラフ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Gibbon, P. (1973)</td>
<td>アレンスバークとキビル研究批判</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Todd, Y. (1975)</td>
<td>ケリー農村モデルグラフ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Curry, J. &amp; Hickey, B. C. (1975)</td>
<td>リトリル州資源調査（経済・人口・社会学的調査）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Smyth, W. J. (1975)</td>
<td>アイルランド農村コミュニティーにおける地域組織の持続と変化</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Duffy, P. J. (1976)</td>
<td>モンハン州農村における人口と土地保有研究</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Schaffer, J. H. (1976)</td>
<td>ウーケー農村モデルグラフ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Twomey, T. J. (1976)</td>
<td>農村家族における農業家族決定と仕事の選択</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Gabriel, T. M. G. (1977)</td>
<td>メイヨー州農村における家族と土地のモニュグラフ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Brannick, T. O. (1977)</td>
<td>クレア州の帰国移民研究</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Carney, F. J. (1977)</td>
<td>1821年到1911年2地域における世帯構成</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Kane, E. (1977, 1979)</td>
<td>ギルタハトにおける家族・親族研究およびアイルランド農村経済研究</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Taylar, L. J. (1977)</td>
<td>ドニゴール漁村の社会史</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Martin, K. (1977)</td>
<td>ドニゴール州アラン摩島のエスノグラフィー</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Almqvist, E. (1977)</td>
<td>メイヨー州農村の社会経済史</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Curtin, C. A. (1978)</td>
<td>メイヨー州農村モデルグラフ</td>
</tr>
</tbody>
</table>
|  | Kennedy, L. (1978) | 農業共同と農 ?
|  | Thompson, H. (1971) | ロンドンディリー農村における土地利用・家族・親族モノグラフ |
|  | Smyth, W. J. (1973) | アーマー州の19世紀社会経済史 |
|  | Leyton, E. (1974, 1975) | アイルランドにおける社会組織の研究 |
|  | McAnallen, M. (1977, 1979) | カトリックとプロテスタント共立コミュニティーにおける村構造分析 |
|  | Blacking, J. (1978) | カトリックとプロテスタントコミュニティーにおけるモノグラフ |
|  | McFarlane, W.G. (1978) | ダウン農村におけるゴシップと社会関係 |
|  | Galway, R. (1978) | フィアーマナーのコミュニティーにおける象徴的アイデンティティ |
|  | Cambell, C. (1978) | エントリム村落のモノグラフ |
|  | Streib, G. F. (1970) | 農民と都市化 |
|  | Curtin, C. A. (1973) | ゴールウェー都市圏地における家族研究 |
|  | Glasscock, A. P. (1973) | ダブリンへの移住の決定過程解析 |
|  | Gordon, M. (1975) | 都市の親族研究 |
|  | Barnes, B. (1975) | アイルランド都市および |
|  | Bax, M. (1976) | ベルファストにおける都市化および鸨民 |
|  | Sacks, P. (1976) | ボンゴールにおける投票行動 |
|  | Gmelch, G. (1977) | ボンゴールにおける投票行動 |
|  | Harris, R. (1972, 1979) | カトリックとプロテスタントコミュニティーにおける家族と近隣研究 |
|  | Burton, F. (1978) | ベルファスト・コミュニティーにおける競争 |
|  | Wiener, R. (1978) | 西ベルファストにおけるプロテスタント労働者階級の研究 |
村社会史
Russell, J. C. (1979) ケリー州農村における家族と宗教分析
Schepers-Hughes, N. (1979) アイルランド農村における精神的疾患
Breathnach, C. (1979) ドニゴールにおける農業・社会開発

1980年代
Breen, R. J. (1980) ケリー農村のモノグラフ (アレンスパークとキンボールの批判的検討)
Marry, M. (1980) 北リトリム農村地域の経済発展
O’Cinneide, M. S. & Keane, M. J. (1980) キララ地域の資源調査
Bell, J. (1982) 北ドニゴールにおける農村モノグラフ
Boyle, M. (1982) 西部アイルランド農村・教区における社会階層システム
Kelly, N. (1982) ドニゴールにおける協同組合と地域開発的社会学的研究
Fitzpatrick, D. (1983) 第1次世界大戦前の農民家族研究
Breathnach, P. (ed.) (1983) ゲールタハトにおける農村開発
O’Connor, J. & Daly, M. (1983) 西リトリムにおける社会構造の変容
Breen, R. J. (1983) ケリーにおける縁組婚と婚姻
Varley, A. (1983) アイルランドの直系家族再検討
Breen, R. J. (1984) 農村サーキューション研究
Shanklin, E. (1985) 南西ドニゴールの民族誌
Kennedy, L. (1985) 北ティペラ

Donnelly, D. J. (1981) 漁村コミュニティの生産・社会組織
Bufwack, M. S. (1982) カトリック・コミュニティの社会構造
Shanks, A. N. (1987, 1988) アイルランドにおけるジェントリーの直系家族研究
Buckley, A. D. (1982) 一平和農村のモノグラフ
Crozier, M. (1985) ガウン農村における相互扶助関係の変化
McVay, M. J. (1985) 北アントリムとデリー農村における家族と親族
McFarlane, W. G. (1986) 農村コミュニティにおけるカトリックとプロテスタントの境界の表現
Harris, R. (1988) シーウェルスターにおける直系家族研究
リーにおける社会変動
Coll, J. (1988) 西ドニゴール農村における家族、近隣、コミュニティ
Kane, E. (1988) コミュニティ研究レビュー
Leeuwis, C. (1989) 西部アイルランドの農業発展

Johnston, N. C. (1989, 1991) 20世紀初頭の家族、近隣、コミュニティ

Maguire, M. (1990) ダブリンにおける市のコミュニティにおける不利益問題
Buckley, A. D. & Kennedy, M. C. (1992) ダブリンにおけるプロテスタント労働者の階級構造
Gulliver, P. H. (1992) 南キルケニー小売業者の社会史
Silverman, M. & Gulliver, P. H. (1991) キルケニー州トーマスクウンの都市のモノグラフ
McCane, O'Siachaín, S. & Ruane, J. (1994) アイルランドの非営利コミュニティ

Bell, D. (1990) バルファストとデリーにおける若者文化その形成過程
Howe, L. (1990) バルファストのカトリックとプロテスタントのコミュニティにおける失業問題
Buckley, A. D. & Kennedy, M. C. (1992) カトリックタウンのアイデンティティ

Cohen, M. (1997) ダウン州におけるリネルン、家族、コミュニティ研究

1990年代
Kennedy, L. (1991) 20世紀初頭のアイルランド農家の相続
Shutes, M. (1991) ケリー農民とヨーロッパ・コミュニティ
Slevin, P. (1991) ドニゴール州地域開発
O'Dowd, A. (1991) アイルランドとイギリスにおけるアイルランド移民労働者の民俗誌
Birdwell-Pheasant, D. (1992) ケリーにおける20世紀初頭の直系家族研究
Guinnane, T. (1992) 20世紀初頭の直系家族研究
Tovey, H. (1992) アイルランド・コミュニティ研究レビュー
Taylor, L. J. (1995) 南西ドニゴール地域におけるカトリックの人類学的研究
Scally, R. J. (1995) モナハン州農村生活史
Salazar, C. (1996) 家族農場コミュニティの人類学的研究
Curtin, C. et al. (1996) 西部アイルランド貧困地域の農村問題
Guinnane, T. W. (1997) 飢餓以降における世帯、移民、農村経済研究
O'Hara, P. (1998) アイルランドにおける家族農場の女性
Phyne, J. (1998) アイルランドサケ漁業における農村社会変動
Davis, J. (1999) アイルランド農村のリーディング
Birdwell-Pheasant, D. (1999) ケリー州における家族システムと家のタイプ
Daly, M. E. (1999) 飢餓以降のアイルランド家族
2. アレンスパークとキノポールによる研究

まずアイルランドにおける住宅・コミュニティの萌芽期の研究として、1890年代にブラウン [Browne, C. R., 1891, 1894, 1895, 1896, 1898, 1900] による西部アイルランドにおけるエスノグラフィー『アイルランド学士院会報』に掲載されたものであるが、それがアイルランドにおける家族とコミュニティ研究の開始であるといえよう。そこではメイヨー州、ゴールウェー州を中心にアラン島、コネマラなどの調査が行われているが、そのエスノグラフィーには身体的特徴、人口、土地所有、共有地、姓、慣習、信仰などの項目が見られ、とくに社会学の項目として挙げられている職業、家族生活と習慣（結婚と離婚との関連）、衣・食・住の情報は有用である。

しかし本格的な研究はアレンスパークとキノポールによる1930年代の調査結果である『アイルランドにおける家族とコミュニティ』である。そこでの理論的枠組みがそれがもたらすアイルランドにおける家族・コミュニティ研究にかなりの影響を与えていることは否定できない。アレンスパークとキノポールの理論的仮説はショカ学派のウォーナーが主張したヤンキーシティ調査で用いられた機能主義人類学のもとづくものであり、そこでは社会が機能的に相互連関する諸部分の統合された均衡体系を意味している。そして研究の目的はコミュニティ全体を捉えることではなく、コミュニティにおける人間の社会行動を検討することに求められている [Arensberg, C. M., & Kimball, S. T., 1968, xxix]。そのような理論的立場から、アレンスパークとキノポールはアイルランドのコミュニティの形式やその成員の生活が親族、結婚にあるでその結合から理解されるものとし、家族構造と親族関係を中心的テーマとしたのである。とくに彼らは家族的秩序、年齢階層、性別、労働の地域的分化、市場と地方都市における経済的な交換と配置という5つの下位体系を用意し、アイルランドの農村生活の主要体系は家族、農村コミュニティという特徴ある形式をもつ度が5つの下位体系をとおして組織化されて形態が5つの下位体系をとおして組織化されて形成されると言っている。たとえば家族的社会的秩序では家族生活と実行連帯、親族の算定方式・義務・協力が完成され、それは直系家族と結びつく家族、移民による離家、農場continue

[66, 301-3]。最後に彼らは1930年代のアイルランドにおける農村社会はよく統合された、比較的安定した社会であると結論づけている。それは機能主義人類学にもとづく当然の帰結と言えよう。しかし後述するように1960年代後半以降そのような立場に対して変容や階層性の観点の欠如が批判されるようになる。

このようにアレンスパークとキノポールの研究には変革や階層性の欠如が批判されるようになるものので、それ以降の研究も基本的には彼らの研究を基礎にしながら批判的検討が加えられた理論的枠組で展開されているとみてよい。

3. アレンスパークとキノポールの後進研究

アレンスパークとキノポールによる研究はアイルランド共和国では1940年代にオニールによるドニゴールの小作農社会的・経済的研究が発表されるのがその例である。

1960年代には農業研究所（An Foras Taluntais）による資源調査がコック（1963）と西ドニゴール（1969）で実施されている。両者ともにそれは4つの地域から構成され、1部が農地と自然資源、2部が経済や経済学の側面、3部が経済、人口、社会学側面、4部が全体の要約と農業開発計画の提案からそれぞれ構成されている。西ドニゴール調査ではコニアスが人口（人口規模、人口動態、人口構成）および農場家族の特徴を480のサンプル調査で明らかにしている [An Foras Taluntais, 1963, 1969]。

1964年にニューマンが編集した『リムロック農村調査—1958-1964』をみると、それは東リムロックの地理的、人口学的、社会構造の分析にとどまらず、社会・経済史からのアプローチを含むところに特徴を持つ。人口と社会構造を担当したマクナブは、アイルランドやリムロック
20世紀におけるアイルランドの家族・コミュニティ研究の視座

での国際移動と国内移動に注目し、社会構造への影響を明らかにしたのである。そして彼が調査した東リムリックの農村地域における階層構造に変化が強く認められたのであり、以前に安定的で閉鎖的であったコミュニティが開放的で不安定に変化し、すべての階層が移動を共有しているという特徴をそこに認めることができる。そして彼は農民とその家族の地位と権威的位置が社会構造を理解する鍵であるとみなしたのである。また彼はアレルネサーケーとキーボールが小農民家族を対象にしたもので、50エーカー以下の面積が54％、50エーカー以上が46％の割合を占めている地域を対象にしており、大規模農民家族が商品化されているのに対して、小農民家族は伝統的であるという階層性に注目しながら、農民、農場労働者と社会構造の関連、求愛パターン、結婚、結婚と相続、家族役割などを詳細に分析している [McNabb, P., 1964]。


1970年代には社会人類学でカブラリルによるメイヨー州ラッケン教区の参与観察にもとづいた詳細なノングラフは注目されてよい。彼は「アイルランドにおいて農民社会はただ存在している。現代アイルランドでは一般的でこの種の社会組織が農場家族で完全に無くなっていると考えられているが、私の論文ではこの関連した解釈を正すことにある」いう立場を明確に示し、とくに土地が親族集団の制王のなかで維持されている経過を辿ることにより小農民と土地関係を明らかにしておくとそこに彼の研究の特徴がある [Gabriel, T. M. G., 1977]。またカーティンによる南アイルランドの農村コミュニティにおける家族と土地に関連させたノングラフ研究がある。そこで彼は土地を基本的資源と見ており、それにに関する社会関係に着目している。すなわち土地は取得されたり、利用されたり、価値づけられ、競争され、蓄積され、売買されるのであるが、それにとくに社会関係と土地の所有・生産・相続の単位である家族と関連させて追究しているところに特徴が認められるのである [Curtin, C., 1978, 6-7]。

1980年代にはシャンクリンによる南アイルランドの人々の日常生活における伝統の意味や影響を分析したエスノグラフィーがある。彼の研究は社会組織、家畜生産、人口変動、アイルランドの歴史と民俗の諸侧面から伝統的創造的意味を探求しようとするところに特徴が認められる [Shanklin, E. 1985]。

1990年代にはサラザールによる研究は、ゴールウェー州の教区を対象にしたインテンシブ
なモノグラフである。そこでは「いかに労働が家族農場で社会的に解釈されるか」という視点から西部と農民コミュニティーの社会宇宙における労働の意味を探る課題としている。すなわち家族農場には生活と労働の両面があると見なされるのであるが、そこでは家族農場における労働が生活の一つの方法であると解釈されている。したがって彼によると、農業労働がどのような感情や制約をとおして社会行動の特徴に組み込まれるかということが強調されている [Salazar, C., 1996, 3-4]。さらにテラーによるドネゴール州を調査地としたアイルランド・カソリシズムのエスノグラフィーがあるが、それも貴重な研究成果であるといえる [Taylor, L., 1995]。

以上のようにアレンスパークとキンボールの研究視座はそれ以降に主に社会科学や社会地理学を中心としたモノグラフ研究に継承されているものとみてよい。

4. アレンスパークとキンボール・モデルに対する批判的研究

1970年代以降アレンスパークとキンボールの研究に対する批判が活発に展開されるようになる。まずプロディの批判的検討はアイルランドの農村社会の概念化における転機であると見なせよう。彼はアレンスパークとキンボールの研究に挑戦するために同じクレア州を調査地として選定している。そして彼は1930年代の伝統的社会の安定性、統合性というアレンスパークとキンボールの結論を受け入れているが、それ以降アイルランドの伝統体系が機能的でなくなり不統合な社会になったと捉える。つまり彼は機能主義モデルから関係を絶ち、伝統的社会に固有な矛盾や緊張に焦点を置く。それは例えば女性の地位におけるコンフリクトや父親の権威に対する息子の反発、若者が土地や農業からの離脱などに顕現されている。このような伝統的な権威、役割、価値構造が侵食されていくものと捉えることが、彼の変動論的アプローチであるといえる。そして彼は人々の社会的、経済的環境の変化だけでなく、相互扶助や近隣の協同における衰退に顕現しているように伝統的社会における価値観がドラスティックに変化するものと見る。また人口のアンバランスや移民の高見割合がコミュニティーに大きなインパクトを与えるとも考えられている。したがって、このような要素すべてが伝統的コミュニティーの状況を悪化させ、崩壊の過程を促進させるものと捉えられている [Brody, H., 1973]。以上のように、プロディはコンフリクト・アプローチから伝統の社会構造にある緊張をとおして農村コミュニティーの崩壊を理解する立場である。

ギブソンは1973年にそのようなプロディ研究を書評論文の形態でアレンスパークとキンボールの批判的検討を行っている。彼によるとアレンスパークとキンボールによるアイルランド農村コミュニティー研究は余りにも一方的なエスノグラフィーであり、アイルランド農村社会が調和的、統合的、安定的に記述されており、アイルランド農村がロマンチックに記述されていることを指摘し、雇用労働力や資本主義的交換・価値の優位性に農村社会変動のカギが求められている [Gibbon, P., 1973]。

1970年代から80年代にわたりハナノはアレンスパークとキンボールの研究を「小農社会論 (peasant society)」の枠組みから整理し、それが1920年代と1930年代における西アイルランドの小農場コミュニティーを記述する理論的枠組みとみなしている。その小農社会は自足性文化であると規定されている。ハナノによるとアレンスパークとキンボールが調査した1920-30年代の西部アイルランドにおける社会構造は、小農社会モデルである経済的、社会的、文化的特徴を示していると言う。すなわち経済的にはアイルランド西部の小農場体系は小規模であり、土地もやせており、労働力の雇用が少なく、農業が家族経営である。そこでは生存のための生産が支配的形態で小資本積蓄しか存在していない。その地域社会は階層性が最小限である閉鎖された相互体系を形成し、そこでは直系家族が支配的である。生計は家族所有の資源の効果的利用に依存し、この世襲財産ある世代から次世代に1つずつ譲って伝えられ、それが同時に後継
20世紀におけるアイルランドの家族・コミュニティー研究の視座

者が結婚し、非相続人は移住をとおして排出されるというメカニズムが明らかされている。

したがってアレンスパークとキンボール・モデルがアイルランド西部における農業と共同体分析の基礎となりうると見なしたのである。しかしハナーンといえどもアレンスパークとキンボールの分析枠組の限界性を認識していた。つまりそのような小農社会体系が1940年代以降解体し始めるのであるが、そのような変化に対して彼は小農社会論の変動枠組みを追求し、それをつぎの3つの側面から検討している。

すなわち第1に交換経済や現金経済の重要性が挙げられる。すなわち例えば相互の労働交換の社会関係が純粋な経済関係に移行することを意味する。第2に資本蓄積や企業家の活動の重要性における増加の結果、所得、生活チャンス、再生産率において大農民と小農民に格差が生じ、階級分化、資本、技術革新が拡大されることになる。第3に、これらの経済的、階級的变化に伴うか先進して、広く近代化で表現される文化的変化が生じていることを挙げている。そして、小農社会の変動の枠組として一方の極に伝統的自給農業経済、安定した親族社会、近隣と伝統的共同体体系があり、他方の極に農業が商品化され、地域的親族集団や近隣集団が崩壊し、地域の小規模農場コミュニティーの社会的、文化的自給性が解体されるという二極がそこに指摘されている。

そしてそのような小農社会の変動論との対応関係において農場家族の変動論も展開されている。すなわち家族変動の枠組として一方の極に小農社会家族（伝統的家族）、他方の極に近代的都市中間階級家族が指摘されるが、小農社会家族の概念は年齢と性による役割分業、父方長の権威バターン、非表出で厳格な感情の抑圧と情緒的支持の役割をもつ母親の専門化を特質として、近代的都市中間階級家族は家事や子供の養育における配偶者間の分離が最小限しか欠如していることが、配偶者間および親子間の権威や権力の最小限化しているという特質をそれぞれものと見なされている [Hannan, D., 1977, 1979, 1982]。

1980年にはブリーンはケリー州バファフォートの農村モノグラフであった第二次大戦以前における1つ目のアイルランド農村コミュニティー再構成する、それ以降のこのコミュニティーがどのように発展し変容したのかを追求するという2つの目的をあげている。戦前のアイルランド農村コミュニティーの構図としてアレンスパークとキンボールのモデルが浸透しているものと判断され、たとえばそれはブロティアがアレンスパークとキンボールの機能主導と非歴史的志向に対して批判しながらも伝統的農村生活の多くの記述を受け入れることに示されている。また、ギボンもアイルランドの農村生活がアレンスパークとキンボールによりロマンチックに描かれていると批判しているが、第二次大戦までの伝統的農村生活に関してアレンスパークとキンボールの記述が多くの真実を含んでいることを見ている。

ブリーンがそれをケリー農村調査で現在からアレンスパークとキンボールの研究時期に遡って検討するに、アレンスパークとキンボールの農村モデルでは説明できないとみる。すなわち彼はアレンスパークとキンボールが戦前のアイルランド農村の社会的、経済的階層化に失敗していることをあがる。つまり彼らは大農民、小農民という階層的対立を認知しているものの、それは国全体のレヴェルどまりであり、ケリー農村研究では小農民に集中させており、彼らは階層化を認識しているにも関わらず大農民をその視野にいれなかったことを批判している。第2にアレンスパークとキンボールは均質で安定した社会の構図がアイルランド農村に妥当すると言う印象をたたびたたいているが、いまやアイルランド農村には地域的、階層的な多様性が認識されるべきであり、その点が問題であると指摘される [Breen, R. J., 1980, 1-2]。すなわちアレンスパークとキンボールによれば家族と地域社会が5つのサブシステムから構成されている主要な体系から成り立つとみなしているが、その主要体系を孤立数として扱い、家族とコミュニティーが長く持続的である静的な均衡体系であり、それがアイルランド農村に一般的で
あると拡大解釈させたことをブリンは批判する。そして1つつの特定の農村コミュニティー内部での階層的変化が観察される。しかも外的な経済的変化に対応して家族、コミュニティの変容プロセスを追求することができたのである。Breen, R. J., 1980, 250] つまり、家族、コミュニティーを従属変数として位置付けるという彼らの分析視点をそこに認めることが可能である。

また同じ時にオコナーとダイリーはアレンスパークとキンボール以降の研究を社会変動の視点からつなぐの三つのモデルに整理している。すなわちアイルランドの農村社会の変動を捉えるために①政治的経済モデル、②中心・周辺モデル、③農民体系モデルが用意されている。政治的経済モデルは経済体系における資本主義の出現とそれが社会、経済、政治関係に及ぼす変化に焦点をおく一方であり、中心・周辺モデルは集団間、地域間、国家間の変化により発展を観るモデルである。たとえばこの視点からすれば現在までのアイルランドはダレット・プリテンとの経済的、政治的関係で把握されることになる。農民体系モデルからアイルランド農村が生存のための農業経済で、しかも伝統的な社会構造から変容した社会であると捉えられるのである。このモデルは前述したフィナンシー農民社会論と一致する性格をもつといえる。

彼らはそのようなモデルからアレンスパークとキンボール以降の研究を整理し、アイルランドの社会的、経済的変化を踏まえて、西リムスティック社会を、社会経済的、人口学的概要、労働状況、ライフスタイル・価値・態度、家族と親族バターンの分析から分析している。1956年と調査時点の1980年における各項目の変化に注目しているのである。例えば西リムスティックの生活は家族を中心に組織化され、その形態が核家族であるものの、家族間の強い親族結合、近隣や友人の重要性が確認されている。そのような西リムスティックでも産業化に対応して農業よりも雇用労働化が選択され、農業人口も老齢化するというように産業化による変化がみられる地域を彼らは検証しようとしたのである [O'Connor, J. & Daly, M., 1983]。

以下のアイルランドにおける農村家族・農村コミュニティーへの変動の視点を中心にフォローしてきたのであるが、とくにハナンの理論的枠組はアイルランドの農村家族・農村コミュニティ変動の理論的枠組を構築する時に示唆的な視点である。またブリンの指摘のように農民社会に階層性を組み込んだ理論的枠組の再構築が必要であると言える。

5. 北アイルランドにおける農村家族と農村コミュニティー研究

北アイルランドにおける農村家族・農村コミュニティ研究はモギーによる1947年の『北アイルランドにおける農村生活』である。それは1940年に設置された「農村調査委員会（The Rural Survey Committee）」の調査にもとづくものであった。その時期の北アイルランドでは1914-8年戦争時以外には農村から都市へ移動した多くの都市労働者が失業状態にあり、農村においても就業機会がなかったのである。そしてそのような状況における農村生活を明らかにしてくれる研究が皆無であった。したがってモギーの目的は北アイルランドの農民の生活を全体として記述することであった。

モギーが調査を開始した時期にはイギリスでは未だ国内でコミュニティ研究がほとんど行われておらず、それはイギリスでは最初の農村コミュニティ研究であるといえる。彼は調査地としてファーマーナー州で1カ所、ダウン州で2カ所、アントリムで2カ所の5地区を選択し、調査項目には世帯のタイプ（農民、農場労働者のなど）、世帯構成、住居、世帯員の職業、家計支出、夫婦の出産、現在の居住状況などを含めているが、それぞれ5つの地区をこのような調査項目にしたかって記述している。モギーの調査には、アレンスパークとキンボールのような計画的な分析枠組を見出すことはできないが、彼の調査には質問紙法が採用されていることおよび調査地がアイルランド教会、カトリック教会、プロテスリアンのどの教派がいかという視点を用意していることに、
彼の特徴を見出すことができる[Mogey, J. M., 1947, 1-3]。したがってその意味で彼の調査は社会学的であると言えるとともに、それ以降、宗教的二分法が北アイルランド農村研究における研究視点となる萌芽と位置づけられてよい。


それ以降ドナンとマックファーレンにより名づけられたカトリック・ナンシーリストプロテスタント・ユニオニストという二分法が北アイルランドのコミュニティー研究に定着することになる[Donnan, H. & McFarlane, G., 1985, 283]。そして、そのような視点はブラッキング・プロジェクトで明確に認められる。そのプロジェクトはペルファスト・クイーンズ大学のブラッキングを代表とする研究チームであり、社会科学研究会議会（Social Science Research Council）の援助で4カ所の調査を実施している。彼らの目的はハリスが提起したカトリックとプロテスタントという二分法もとづいて、カトリックとプロテスタントではどのような社会的状況で人員の補充（Recruitment）がなされるかを追究することであった。すなわちプロジェクトの目的はある状況における補充を研究することであったが、人々がカトリック・プロテスタントという北アイルランドの政治的、宗教的二分法に囚われることを無視するかを検討することであった。そして彼らによると補充はある個人がある特定の状況で参加することを決定する過程であると見なされているが、その補充は役割の2つのレヴェル、つまり帰属の役割と達成の役割により媒介されると考えられており、それを決定するのがカトリックとプロテスタントという宗教的要因なのである。

そのような補充過程の調査に4つの地域が選定された。その基準はカトリックとプロテスタントの割合であり、カトリックの多い地区であるアントリム州のバリークアン（Ballycuan, 82％）、プロテスタントの多いダウン州のドラムネス（Drumness, 76％）、プロテスタントの比較的多いファーマナー州のグレンリーヴン（Glenleven, 68％）の3者を合成しアントリム州のグレンナン（Glenarm）の4地区である。とくに彼らは社会的状況を私的領域と公的領域とに区分し、私的領域に相互援助、訪問、いさかい、生活週期の出来事（結婚、葬式など）、公的領域に非組織的レジャー活動、政治集団・ボランティア組織・スポーツクラブへの参画、毎年の祝祭日・時折の出来事（7月の進撃やデナーガンなどで）に再区分し、それらの指標に基づいて4つの地区の比較分析を行っている。一方でプロテスタントという生得の地位により熟練工や専門職、他方でカトリックの生得の地位により未熟練工につきやすいという生得の地位による階層化が明確に認められるのであるが、宗教
がそのような公的領域において生じる補充の原理になりうるのである。地方では私的領域における日常の相互作用で同じ宗派である人々が親族、友人、近隣関係を維持することになる。

とくに私的領域における異宗派間婚約（mixed marriage）がカトリックとプロテスタントのアイデンティティに関わる行為を最も先駆に発現させる。彼らの調査期間中に、この種の結婚は4組あったが、一組の結婚は花嫁がカトリックであり、そこでは花嫁の親族が結婚式において排除されたが、披露宴では彼らの出席が見られたという。他の二組は結婚式が花嫁のプロテスタント教会で行われ、残りの一組は妻がカトリックであったが、それは登記所で行われたと言う。異宗派間結婚が行われたならば、当事者の家族と招待者にこのような問題をもたらすのであるが、それはカトリックとプロテスタントがお互いに社会的距離を維持すべきであるという考えに対する挑戦なのである。それゆえそれは忌み嫌われているのである。そして将来女性子供の宗派的帰属をめぐって、彼女が改宗するかどうかの決定をしなければならないのである。彼らはそのような地区を対象として男女の就業、社会的地位、コミュニティ、家族、日常生活という項目で詳細な分析を行っている [Blacking, J., 1978]。


したがって、以上のような北アイルランドにおけるカトリックープレスタントという研究視座は現在では大部分の北アイルランドの農村家族・農村コミュニティー研究に基本的に認められているのである。

6. アイルランドにおける直系家族研究


まずギブンとカーティンの研究は、かってアレンスパークとキンボールによって提起された直系家族研究に直接照射するものであり、これまでの歴史的文献、フィールドワークによる調査、1911年のセンサス原簿の世帯サンプルを資料として直系家族を追究している。そして彼らがおもに依拠するデータは1911年のセンサス原簿であり、それはメイヨー州、リムロック州、クレア州、キルケニー州、コーク州、南テッペ
ラリー、ミーズ州という7州から15タウンランド（村落）が抽出され、サンプル数は295世帯の1410人である。そして、彼らの研究の特徴は直系家族を規範的要因と状況的要因と関連づけて捉えることにある。直系家族の規範的要因が世代構造、相続と他出の側面から明らかにされる。すなわち分析レヴェルではサンプルデータが性差、婚姻の割合、平均世帯規模、世帯主の結婚の割合、世帯主の平均年齢、子供のいる世帯の割合、世帯の世代数、世帯構造という家族変数から分析され、その結果直系家族を含む3世代世帯（12.2％）と拡大家族世帯（40％）の存在が確認されることになる。さらに彼らは直系家族の状況的要因として1000人単位の移民率・出産率・死亡率、1000エーカー単位の穀物生産の土地割合、1000エーカー単位の農場労働者数、1000エーカー単位の家畜数、平均土地地方税評価額、平均土地保有規模を挙げ、7州の地域条件と前述の家族変数と関連づけ、直系家族が中規模農場地域において家族規範として存在していることを明らかにしたのである [Gibbon, P. & Curtin, C., 1978]。

アレンズパークとキンボールの調査地（ルオフ、アイナモーナ、アイナーの3カ所）に近いクレア州コロフィンとイニッシュモーンでは3世代世帯が26％と一番多く、拡大家族も43．6％を占めていることがわかる。ここで拡大家族は垂直的拡大（たとえば世帯主夫婦と子供と世帯主の親）と水平的拡大（たとえば兄弟、姉妹などの傍系親を含む）の両タイプを含み、拡大家族の多さと直系家族の多さとは正の相関ではないことに注意しておく必要がある。しかし、直系家族は西部地域の方が東部地域より強く確認されたものであり、その意味でアレンズパークとキンボールの直系家族説が承認されたものといえる。

そのようなゴブンとカーティンの研究に対して、バーレーをフィッパトリックによるいくつかの批判がある4)。バーレーは4つの3つの疑問をあげる。すなわち、それは第1に、ギボンとカーティンによると直系家族の成立要件は中規模農場地域と小商品生産が必要条件と見なされているが、直系家族の多さがそれらの要件を十分説明できないこと、第2に、彼らは小農・中農の区分をやっているが、それは不確実であるとされたこと、第3に直系家族が農場世帯の労働供給に貢献しているという議論をしているが、それらに対する説明が必要であるという3つの疑問が提起されている [Varley, A., 1983, 381]。

しかしながらそのような批判はいうものの、彼らの研究が当時利用可能になった国立公文書館に所蔵されている1911年センサス原簿という一次資料を利用していることに特徴があり、彼らの研究がそのような資料にもとづく研究路線を開発した点は高く評価されねばならない。

1980年代にブリーンが調査したリーコンバフォートでは1911年の3世代家族が15.7％であり、直系家族の存在を確認したのに対して、それ以降直系家族は解体し、1978年には7.7％に減少していたという。したがって、ブリーンはバフォートでは直系家族があまり支配的でなかったと判断している [Breen, R., 1980]。

1980年代末にコリガンは1911年のセンサス原簿から抽出された495世帯の分析から直系家族や多核世帯が存在していたものの、当時の世帯は核家族が支配的形態であり、直系家族は多様な世帯の一つの形態であると結論づけ、直系家族の存在を先行研究者が過大に評価しすぎたとみる。すなわちアレンズパークとキンボールにおいて記述されている共住パターン・モデルがデータで確認されなかったと判断されたのである。彼らの共住パターン・モデルの解釈は間違いないが、しかもアイルランドのある地域では拡大家族や多核世帯が確かに重要であったが、それにもかかわらずアレンズパークとキンボールの以降の研究者がその重要性を強調しすぎたのではないかとの立場から、それは直系家族存在の結論を

4) ギボンとカーティンは寿命の延びが直系家族の成立要件とみなさず、1908年に採用された老齢者年金制度がその傾向の支持要因と見なしている。
留保したものと見られる[Corrigan, C., 1989, 1993]。

1990年代にはバードウエル・フェサントによるケリー州パーカイツの調査がある。彼女はこれまでのアイルランドの世帯分析に階層の視角が欠如していることを挙げ、階層と職業が重要な変数であるという認識から20世紀初頭のアイルランド農村で、1901年と1911年のセンサス原簿を資料として直系家族を検討する。その結果1901年には拡大家族が21.8%、多核家族が6.6%、1911年にはそれぞれ27.7%と7.8%であることを確認している。そして1911年には直系家族がかなり支配的タイプであったものと判断されるとともに、特にそれが農民家族において優位であったことを明らかにしたのである[Birdwell-Pheasant, D., 1992]。


つまり、これまで検討してきた直系家族研究ではセンサス原簿が資料として利用されているのの、1901年か1911年のセンサスのどちらかが資料として利用されるか、あるいは二つの資料を利用した場合でも集計は各年度単位であった。しかし、ギナは1901年と1911年の連続性に注目したのであり、その期間が10年であったとしても直系家族の転換分析には不可欠であると言えるのである。

以上において主要な直系家族研究をフォローしたのであるが、それらには20世紀初頭に直系家族の存在を認める研究とそれを留保する研究にわかっていることが理解された。筆者は第1に20世紀初頭に直系家族がどの程度の割合であれば、それが存在したと認められるのかという問題と直系家族が存在していてもそれが家族規範と判断されるかという問題があると思われる。


7. 都市家族・都市コミュニティー研究

都市コミュニティー研究では1930年代にキーボールによる博士論文『アイルランド・タウンの経済構造における商人とその家族』が最初の研究である。それはクレア州エニスを調査地としたタウンと農村における小売商の機能を追究したものであった。タウンと農村における接触や動きを検討する時に、それらは商業体系をめ

5) 歴史人類学のトッドは直系家族の分布がヨーロッパでは国として14か国にまたがり、4つの民族学的地域に分かれていることを明らかにした。そのうちケルト・グループとして、スコットランド北部からコーンウォールに至る大ブリテン島の西側周縁部、アイルランド、フランスのブルターニュ地方を挙げているが、これはケルト文化との関連性を示唆しているものと思われる。トラッジ「新ヨーロッパ大全Ⅱ」石崎晴司訳、藤原書店、1992、64ページ）
ぐって組織されていることがわかる。それらの体系の基本的単位が商家であり、タウンと農村において親密な関係をもたらすのが家族的基礎であると考えられる。そして慣習的な商取引を通じて商家は都市社会でその地位を強化することができるとみている。商家と農村との安定的な関係は信用貿易により維持されているのである。その信用貿易は基本的に親族関係にある程度依存しているが、さらにそれが親族以外の人々にも拡大されていくのである [Kimball, S. T., 1936, ii–vii]。キープールはこのような理想的視座からクレア州エニスの小売商家族を分析するのであるが、それは小売商とその店員の性、年齢、家庭という属性、商業体系への奉公人の加入、結婚を含む金銭制度による商家の確立、商家の形態、小売商における家族と個人の様子などに明らかにしている。彼の理論的視座にはやはり機能主義がみられるとは言うまでもない。彼の研究はアレンスパークとキープールの『アイルランドにおける家族とコミュニティー』の第二版の第二部に追加されたのである。しかし、それ以降農村家族・農村コミュニティー研究が盛んであったのに対して、都市コミュニティー研究はかなり限定性を強くもつことになる。

1960年代にハインフリーズによりダブリンを対象に都市コミュニティー研究が行われている。それは1960年代がアイルランド共和国で農村人口と都市人口が同じ割合になった時期でもある。ハインフリーズは都市化が家族構造やそれに関連するコミュニティーにどのような影響を与えるかというテーマ設定を行ったのである。調査対象者はダブリンに居住する29のカトリック家族であり、彼はそれらの家族を「新しいダブリン人」と名づけているが、彼らは農村部から移住してきた二世の都市民であり、ダブリンで生まれ、育ち、結婚した人々であり、その点で農村から移住してきた彼らの親世代とは状況が相違している。そしてそのような新しいダブリン人家族と農村家族が比較検討され、それらの違いが記述され、都市化により彼らの家族構造やその成員がどのような変化を経験したのかを追究したところに特徴がある [Humpherys, A. J., 1966]。しかし、そのような研究はそれ以降充分に継承されているとは言いがたいのである。


ライアンはキープールが調査した同じエニスで労働者階級研究をされている。彼は資本主義の現象以来の労働者階級により経験された生活と1980年代におけるアイルランド労働者とかれの家族に焦点を置いた詳細な分析をしている。そしてエニスのタウンの概説、家族と家族、電気産業における労働、家族分担、家事労働、親族と親人などの項目をとおして労働者階級の生活を記述している [Ryan, C. A., 1987]。

アイルランドの都市コミュニティー研究はこのように1980年代以降に実質的に展開されたとみなよい。その代表的な研究はシルバーマンとガリバーによるキュープリーにおけるトーマスタンの一連の研究であろう。最初彼らが意図したのはトーマスタン教区の840–1833年にわたる地方史を記述することであった。しかし、それは単に出来事や建築物の記述ではなく、社会を作り出した出来事や人々の分析であり、歴史の衰退や流れを描写したものである。それは
教区の人口学的側面、結婚状況、1901年における家族、1980年の調査結果、トーマスタウンの取引と産業、土地と農業（地主との関係を含む）、政府と選挙、ナショナリズム運動、宗教、公共的サービスと任意団体という項目により区分されて記述されている。その後ガリバーは1992年に「南キルケニーにおける小売商と農民－1840－1981」という論文で小売商と農民の関係を追究している。彼の焦点は小売商にあるが、その分析に以下のような二つの仮説が用いられている。第1に小売商が農場家族から補充され、彼らの子供が農場家族に婚出する傾向があるという仮説である。第2に、小売商は影響力のある男で、公共的義務では地域リーダーであるという仮説である。そしてこのような仮説を地域レベルでの詳細な情報で検証がなされるのである。たとえば第1の仮説は小売商と農民は親族関係で密接な結びついており、彼らは相互に依存し支持関係をもつことが検証されている[Gulliver, P. H., 1992, 176-7]。そのようなガリバーの方法は前述した「キルケニーによる理論的視座を継承したものと判断されよう。

その後シルバーマンとガリバーは『商人と小売商－アイルランド商業タウンの歴史人類学』を1995年に刊行しているが、それは商人と小売商に焦点をおくトーマスタウンの過去200年にわたる商業史である。とくに彼らには小売商の経営戦略と家族による商売の持続と衰退を解明することに目的があったのである。そしてその解明のために新しい概念、すなわち従属理論、近代化論、階級理論、家庭再産・経営学、小企業の社会・経済論など現代盛に論争されている考え方を取り入れることにより小売商の歴史が解釈されようとしているのである。彼らはタウンの歴史、商業史、小売業史という三つの独立した歴史を詳細に記述しているのである[Gulliver, P. H., & Silverman, M., 1995]。このようなアイルランド都市史の歴史人類学的研究は貴重な都市家族・都市コミュニティー研究であるといえる。

他方、1970年代の北アイルランドの都市コミュニティーをみれば、北アイルランドの都市コミュニティー研究にも前述したハリスラが提示した農村コミュニティーの研究視座の影響が顕著に認められる。バートンによるベルファストのコミュニティー研究は、北アイルランドの今日的問題を象徴しているベルファストをエスノグラフィーの方法で初めて明らかにした研究である。とくに彼の基本的関心は北アイルランド社会における社会的・歴史的条件からIRAイデオロギーと政治を捉えることであった。そして彼は北アイルランドで政治化された暴力を分析するが、彼の分析は宗派的敵意心の最もよく現わされているベルファスト労働者階級のエスノグラフィーと社会意識の研究で扱う理論の伝統に根ざしている。アイルランド共和国軍の過激派のIRAにおけるイデオロギーが北アイルランドにおけるカトリック・イデオロギーと政治的連合していることを示すことであった。この全体的なイデオロギーはコミュニズム、宗派心、共和国統合主義の3つが相互に関連したものと見なされているが、他方IRAイデオロギーは市民権のレトリックをとおして表現される民族解放の政治として描かれている。そしてIRAの政治的・軍事的闘争がカトリック・コミュニティーで明らかにイデオロギー形成の1つの発現であると捉えられているのである[Burton, F., 1978]。また同時期にウィナーによるプロテスタント労働者階級の研究もみられる[Wiener, R., 1978]。


1990年代にはハワイによるベルファストにおける失業者のエスノグラフィーが見られ、それは初めてイギリスでコミュニティーを基礎に置く現代の失業研究であるといえる。その研究はベルファストでカトリックとプロテスタントの既婚の失業した男性を対象としたものであり、彼
20世紀におけるアイルランドの家族・コミュニティー研究の視座

ラの社会的、心理的、物質的状況を明らかにしたものです。彼は北アイルランドでの産業発展の歴史とカトリック・プロテスタントの宗派的分離という二つの軸から失業者の問題を分析しているのであるが、そこに彼の研究の特徴があるといえる [Howe, L., 1990]。したがって、以上のように、北アイルランドの都市家族・都市コミュニティー研究も農村コミュニティー研究と同じカトリック・プロテスタントという二分法的視座が顕著に認められるのであり、そこに北アイルランド問題への問題意識が根強く反映されているものと考えてよい。

1990年代におけるコーハンの『ダウンストリートにおけるリネン、家族、コミュニティー』はシルバーマンとガリバーの研究と並ぶ貴重な歴史人類学的研究である。それは一教区のリネンの産業化についてであるが、それがクロムウェルの時代、プロテスタント化、大飢饉、雇用者の家族長の性格、労働者の家族とコミュニティー生活を含む農村産業地域における資本主義的発展のミクロトリストリーとして展開されているのである。とくに彼女は、社会建築、宗教、ジェンダーの歴史的、文化的関係に着目し、階級形成の宗教による構造層化と、社会階層構成、職業階層化、親族関係、居住、教育パターンの影響を受けていると把握するところに特色があるといえる [Cohen, M., 1997]。


以上のように都市コミュニティー研究は徐々に増加しているが、北アイルランドでは明確な理論的枠組みが確立されているものの、アイルランド共和国におけるそれらは農村コミュニティー研究と比較すると、そこに共通の問題意識が希薄であることは否定できない。しかし1993年にカーティン、ドナ、ウィルソンというアイルランド共和国と北アイルランドの研究者により都市コミュニティー研究を喚起する目的で編集されたのが『アイルランドの都市文化』であった [Curtin, C., Donnan, H. & Wilson, M., 1993]。それは1989年に農村コミュニティー研究を中心に刊行された『下からのアイルランド社会変動と地方コミュニティー』の続けに位置付けられている。そこにはアイルランド人によりなぜ都市生活の比較人類学的研究が展開されなかったのかを探る目的があったのである。そしてそこでは都市コミュニティー問題とされる都市貧困問題、農村都市移住、都市生活への適応の問題とともに、都市開発の歴史的、地理的、都市政治、ジェンダー、若者文化が取り上げられているものの、都市コミュニティーの共通の理論的視座は明確に認められない。しかし今後どのような研究を契機として都市コミュニティー研究が期待されるところである。

8. むすびにかえて

これまで北アイルランドの家族、コミュニティー研究のパイオニアであるアレンスバークとキングボールの研究、彼らの継承研究、彼らの理論的枠組を批判した研究、北アイルランドにおける独自的視点からの研究、直系家族研究、都市コミュニティー研究をそれぞれ紹介しながら検討したのであるが、やはりとくに北アイルランドの農村家族と農村コミュニティー研究には基本的にアレンスバークとキングボールによる研究視座が何らかの形で反映されていることを再度確認することができたのである。それに対して、都市家族・都市コミュニティー研究にはそのような依拠する研究が少なかったことも、それが研究の後発性を導いた1つの要因ではないかと考えられるのである。

V., 1984], 最近盛んに議論されている農村におけるジェンダー研究 [Shortall, S., 1990, O'Hara, P., 1998] がそれぞれ重要なテーマと思われるが、ここではそれらについて触れることができなかったのであり、それは他日に期した。

参考文献
Bell, J., Relations of Mutual Help between Ulster Farmers, Ulster Folklore, 24, 1978, pp. 48-58.
Birdwell-Pheasant, D., The Home "Place": Cen-


Cearbhall, D. O., *Community Development in the Killala Area*, Social Sciences Research Centre, University College Galway, 1983.


Curtin, C., *Family and Kinship: In a Middle Class Housing Estate*, Unpublished MA Thesis, Uni-


Curtin, C., Haase, T. & Tovey, H., (eds.) *Poverty in Rural Ireland*, Oak Tree Press, 1996.


Gulliver, P. H., & Silverman, M., *Merchants and Shopkeepers, A Historical Anthropology of an*


Hannan, D., Rural Exodus: A Study of the Forces Influencing the Large Scale Migration of Irish Rural Youth, Geoffrey Chapman, 1970.


Hannan, D. F., Displacement and Development: Class, Kinship and Social Change in Irish Rural Communities, The Economic and Social Research Institute, 1979.


Harris, R., Prejudice and Tolerance in Ulster, Manchester University Press, 1972.


Kane, E., A Review of Anthropological Research in Ireland, North and South, in Donnan, H., & Ruane, J., (eds.) The State of Social Science Research in Ireland, Royal Irish Academy, 1988, pp. 95–110.


Kennedy, L., Social Change in Middle Ireland, Studies, 74, 1985, pp. 242–251.


Larsen, S. S., The Two Side of the House: Identity and Social Organisation in Kilbroney,

Leeuwis, C., Marginalization Misunderstood: Different Patterns of Farm Development in the West of Ireland, Agricultural University Wageningen, 1989.

Leyton, E., Conscient Models and Dispute Regulation in an Ulster Village, Man, 1, 1966, pp. 534-542.


Leyton, E., Opposition and Integration in Ulster, Man, 9, 1974a.


Meghen, P. J., Community Studies in America and Ireland, Rural Ireland, 1961, pp. 48-67.


O'Brien, L. M., Socio-Economic Interaction in an Irish Rural Community: A Case Study in North Tipperary, Unpublished MA Thesis University
College Dublin, 1974.
Smyth, W. J., *Cloghenn-Burncourt, A Social Geography of a Rural Parish in South Tipperary*, Un-


Todd, Y., *The Dingle Commercial Fishermen*, Un-
The Perspective of the Family and the Community in Ireland in the Twentieth Century

Yoshifumi SHIMIZU

The aim of this study is to treat some perspectives of the family and the community in Ireland in the Twentieth century. I arranged all studies of the family and communities undertaken in Ireland chronologically from the early Twentieth century to present on Table 1. I can roughly understand some characteristics from Table 1. First there are many studies of rural family and rural community in the Republic of Ireland every ten years, but the limited studies in Northern Ireland concentrating on the 1970's and the 1980's. We can find the definite contrast between the studies of the rural family and the rural community and the urban family and the urban community, because the full-scale of the latter has began from the 1970's.

I prepared some following perspectives of the family and the community in the Republic of Ireland and Northern Ireland.

First I took the pioneer work of "Family and Community in Ireland" by Arensberg, C. M. & S. T., Kimball and examined their theoretical framework.

Second I took some typical studies inheriting of Arensberg and Kimball's model by social anthropologist and social geographer.

Third I examined the critical studies of the theory of Arensberg and Kimball's model from approach of social change and social class.

Fourth much of research of the rural family and rural community and the urban family and urban community undertaken in Northern Ireland has sought to account for the emergence and reproduction of the Catholic, Nationalist/Protestant, Unionist dichotomy.

Fifth I could find that the distribution the form of stem family that sustained by two elements of the family norm and the situations of family limited in the West of Ireland.

I can conclude that it is quite clear that the majority of studies carried out by sociologists, anthropologists and geographer tend to underplay the framework on the model of Arensberg and Kimball in greater or less from above my review.